https://rodosoken.com/

男女労働者の「生活時間」インタビュー

女性労働研究部会

労働総研の女性労働研究部会は「男女平等社会をめざす賃金・生活費・生活時間予備調査」をおこない、その概要は『労働総研クォータリー』(1991年夏季号)に掲載されている。この調査では1日15分刻みの生活行動を記入するという方式をとったが、その調査対象のなかで特徴的な2名の方からインタビューをおこなった。一人は単身者で女性専門職の左谷恵津子さんであり、あと一人は共働きの調査対象のなかで家事分担がすすんでいる井上優子さんである。インタビューは女性労働研究部会の木下武男と岩本直美がおこなった。なお「調査報告書」では個別事例で両者とも取りあげられている。

共働き夫婦の家事分担

夫婦で家事分担をおこなっていくために、残業がなく、また土曜も休みという男性の勤務状況が、その条件として大きくかかわっている。しかし、このような労働時間の条件だけが家事分担のあり方を一方的に規定するものでないことも確かだろう。そこには男性の家事分担の意識の高低、性別役割分担意識をどれだけ払拭しているかどうかの度合いが、大きくかかわっていると思われる。今回の調査の中で夫婦で最も家事を分担して行っているのが、井上さん夫妻(30代)の事例である。(7月20日インタビュー)

◆やるのが当たり前

――平日もよく家事を分担されていますが、何時ごろお帰りですか。

(夫) 千葉県の水道局に勤務しています。通勤時間は1時間半かかりますが、平日は6時40分ぐらいには着きます。残業はほとんどなく、土曜日は隔週休みですが、有給休暇はなるべく土曜日にとるようにしています。

(妻) 私立の保育園に勤務しています。4交替でやってますから、ふだんはよく5時ぐらいには帰ってきて、食事をつくって、また組合活動に出かけていくということが多いです。

――労働時間がわりとゆるいことが、男女の家事分担の条件になるのではないかと思うのですが、その点はどうですか。

(妻) やはり夫の残業があまりないのは大きいです。保育園でも深夜まで残業してくる男性の例はよくありますから、そういう点では恵まれていると思っています。

(夫) 地方公務員の職場である私の水道局では、残業をあまりやらないという雰囲気があります。労働組合も強いですから。

――家事分担について、よく男性に「協力してもらっている」、男性も「手伝う」という言い方がありますが。

(夫) うちでは協力ではなく、やるのが当たり前ということです。今にはじまったことではなく、子供が年子でいやでもやらざるを得ないものがありました。

https://rodosoken.com/

――あと、男性が家事をやる場合に、今まであまり家事の知識や方法、生活技術が身についていないということがあると思いますが。

（夫）私も家事は全然知らなかったし、料理も得意ではありませんでした。最初、味噌汁でだしをとるというのがわかりませんでした。

（妻）だけど、図書館にいって「男の料理」などを研究していますよ。

――子供が年子で半ば強制されたところから出発し、そこから技術を身につけ、さらに「協力」ではない、当たり前の関係に入っていたわけですね。

◆生活者としての柔らかさ

（妻）子供がいる場合、やらざるを得ないことがありますから、そこから自分が役に立っているし、必要だというところにきたと思います。それに地域に、組合活動もよくやっていて、家事もやっている人がいました。まわりの人の影響もあると思います。

――組合活動もやっていて、家事もやる人はよく見かけますが、家事をこだわりなくやっている人の発想は、労働組合のなかでも違いがあります。幅が広いのと、いろんな人の意見を聞こうとする姿勢、言うことだけでなく、すぐ手も足もでていく行動性など、そういう男性に共通しています。

――生活者としての発想、生活を背負っている柔らかさでしょうか。家事をよくやることをその人の好き嫌いや個性にしてしまうと、一般性がでてこないのでまずいのですが、共通するのは生活者というところでしょうか。

調査で特徴的なのは共働きの場合、平日や土曜日にはわりと家事分担がなされているのですが、日曜日に、しかも女性が終日いるときには、男性のあり方が出てきます。

（妻）どちらかが新聞をみているとか、テレビをみているとかいう発想はないのです。二人で行動しています。テレビの見方も、良いものを二人でみるということです。

――そういえば、日曜日に「洗濯」の行動のところに「ビデオ」というサブ行動が記入されていましたから、アニメを借りて子供と一緒にみながら、洗濯物をたたんでいるのだなあと推測しましたが。

（妻）たしか、「トトロ」だったと思います。

――調査の他の事例でも、組合活動家でもテレビを終日つけているというのが目立ちました。

（妻）本当は子供が10歳になるまでテレビは置かないという主義でしたが、良いものもやっていますから、一昨年に買いました。食事の時はみないとか、一日何分とか決めてみせています。好きですからみせたらきりがありませんから。

◆生活者としてのライフスタイルと家事分担

――そうするとだんだんわかってきたように思うのですが、テレビの見方にしろ、子供の育て方にしろ、そのようなライフスタイルを確立することが爛熟した消費社会やテレビ文化の氾濫のなかで大切なことであり、それに流されずに生活上のいろんなものの見方や考え方を確立することと家事分担とはかかわりがある、つまりそのようなライフスタイルの一環として家事分担もあるのではないかと思います。

（妻）私よりも夫の方がその辺はきちんとしていまして、食事時のテレビはビデオでとっておいて、食事をしてから、ずらしてみせるということもやっています。教育観にしても育った家庭に反発して自分の子供は、というところがあります。夫も朝、職場に行く前に子供と一緒に散歩をしています。

――家事分担と職場の仲間づきあいと矛盾する

https://rodosoken.com/

ことはありませんか。

（夫）専業主婦が多く、まだ職場が終われば、外で一杯というのが多いようです。仲間づきあいでは、今のところ共働きだからしようがないということになっています。

（妻）共働きでも、「旦那様」というようなところも多いです。それで、うちは珍しいと言われています。しかし、うらやましいという反面、内心ではよくさせているわ、という女性の意識もあるようです。共働きでも夫は何もしないというところはあるのですよ。同じ年齢層ではうちは例外扱いですが、若い層では、やっているところもあります。

――家事をやっているかどうかだけでなく、夫婦で共通の行動や価値感をもっているかが、まず大切なのでしょう。旦那様扱いしても、うちはうちでやっているからいいんだというところもあるのでしょうが、本当のところはどうなのでしょうか。

（妻）確かにあまり会話がなかったり、一方的というところが多いようです。子供のことでは一致していても、仕事なんかでは旦那の考えに従っているようで、大丈夫かなとも思います。

――これからの労働者の生き方としては、教育や子育ての危機状況の中で夫婦が上下関係でやっていては、いられないようになってくると思います。家事分担をきちんとしていて、疲れるという気持ちがでてきませんか。

（夫）無理矢理ではなくそれが当たり前になり、生活の一部になっているから、よほどでないと疲れるという意識はないです。子供が２人いて、夫婦の片方がいなくてやっていたら大変だし、逆だったら大変だろうなあ、ということがわかりますよ。子供が１歳か２歳の小さい頃は、仕事が終わってすぐ家に帰ってきて、一日すぎると「ああ今日やっと終わった」という感じでした。

――多くの日本の男性は、そういった苦労を知らないで通過してしまうわけです。だから、専業主婦はそれなりに違う種類の苦労があるのだと思います。

（妻）専業主婦の方が育児ノイローゼになったりするのかなと思います。

――専業主婦は専業主婦なりに、役割分担で、男女の上下関係のなかで旦那様と言いながら、腹の底では怨念のようなものがあるのでしょう。主婦のキッチンドリンカーが増えているとも言われています。

（夫）どこかにはけ口があればいいのでしょうが、どこかででてしまうのでしょう。

――地域とのつながりはどうですか。地域とかかわらないと子育てはできないところがあります。

（妻）子供同士で学童保育の仲間と遊んでいますし、うちでも来たら拒みません。お互いさまですから。特に団地ですから大勢いますし、同じ号棟で行き来しています。そのなかで子供は育っています。

専門職女性の労働時間

左谷恵津子さん（40歳代）は、「調査報告書」では個別事例として、「平日の朝10時から夜10時15分まで勤務し、11時に帰宅している。事例Eの女性は事務職についており、年収は40歳代で780万円である。土曜日と日曜日は休みのようであるが、それぞれ５時間の『労働組合・政治的活動』の時間が記入されてあった」と記述されている。均等法以後、女性の働き方は大きく変わったが、そのなかで専門職女性の変貌ぶりはすさまじい。残業・深夜労働という苛酷な仕事のさせられ方であるが、また同時に、そこには男性とは異なる専門職女性の世界がある。（７月

https://rodosoken.com/

8日インタビュー)

◆均等法以後の専門職女性の労働

――マスコミで働いていらっしゃいますが、その仕事の状況からお聞かせ下さい。

(左谷) 民放のテレビで、本社は福岡にあってその東京支社に転勤できています。テレビの収入のうち60%が広告収入です。ローカル局になればなるほど東京の大手スポンサーの広告に依拠しなければいけない、そうすると東京の営業所が収入上重要な位置を占めています。東京支社は具体的には大手スポンサーを獲得する広告の仕事と、キー局との折衝です。私はそのなかでテレビの番組の大枠をつくる編成の仕事で、キー局との交渉や打ち合わせの仕事が主です。労働時間は10時から6時までですが、週の半分以上は外で打ち合わせや会議をやっています。番組替えの4月と10月の前1か月半ぐらいは仕事が集中します。事務職の女性でも1か月50時間ぐらいの残業があります。

――そのような残業時間は均等法の前と後とでは変化はありますか。

(左谷) ものすごく変わりました。私の前任者は男性だったのです。そこに転勤で来て女性があてられているわけですから、仕事の中身からすると男並みの仕事をしていることになります。

――そうしますと、均等法以前にそのような仕事はなかったのですか。

(左谷) そうです。総務とか経理とか秘書課、あるいは報道とか制作とかの仕事がありますが、そこの雑用係でしかありませんでした。私も、入社して20数年になりますが、経理としてはいりました。

本社は390名ぐらいの従業員で女性が60名位いますが、そのほとんどは、かつては一般事務でした。均等法以後は様変わりしました。今、報道記者で女性も増えています。それは組合が「現場に女性を」と主張してきたことでもありますが。

――マスコミの仕事は性格上、男性の場合によくのめり込む面があるといわれますが、女性の場合はどうですか。

(左谷) まわりがそういう歯車で動いていますから、自分だけNOといえません。今、私のまわりに均等法以後入った女性が結婚退社していくのをよく見かけます。特に報道記者などの現場の女性です。「なぜ辞めるの」といいますと、「とても身体がついていけない」、「子供がつくれない」という言葉がかえってきます。

――女性の専門職の仕事は異常ですね。普通だと結婚できない。よほど男性の協力がないと仕事を続けられませんね。

(左谷) そうです。9月から5時までとなっていますと、自分の生活時間のリズムがつくれますでしょう。それがありませんから。均等法後採用された女性がいて報道の現場にまわされたのですが、大学出てもその寮からでられなかったのです。給料はあっても引越す時間がない、3ケ月間冷蔵庫に食べるものを入れることができなかったということがあります。他の例ですが、現場の人達は食べるものを買う時間がないから、親が心配して上京したということをアンケートで書いていました。私たちの婦人部の課題は男女差別と長時間労働です。

長時間労働と要員との関係は非常に大きいです。私は年次有給休暇は必ずとるということで人生観として2年間やってきました。職場の人達は私のことを「歩く有給休暇」と言っていましたが、しかし要員が一人減ってしまったら、もうできなくなってしまいました。

――福岡本社で雇用され、東京に転勤してくる女性はどのくらいいるのですか。

https://rodosoken.com/

（左谷）今度で４人目です。均等法以前は現地採用、つまり女性は親元から通うということが前提でした。東京支社といえども現地での採用でした。もちろん転勤はありません。その採用の原則が変わり、現地採用で転勤させるようになりました。私は10年前に希望して来ましたが、均等法以後の女性では本人の希望もなしに、ローテーションを組んで転勤させます。ほとんどが独身女性です。

――東京転勤の場合の生活費はどうですか。

（左谷）特に住宅費ですが、私どものように組合がある場合には、会社の借り上げ社宅がありますからいいのですが、それがない場合には、東京転勤は島流しのように同情されて東京に来ています。私たちのところでは、独身女性よりも男性の方が、生活設計が立たないので嫌がりますし、早く戻ろうとします。福岡では家は安く購入できますが、30歳すぎまで東京にいたら生活設計の見通しが立てにくいからです。

――キー局とローカル局との格差は大きいですか。

（左谷）私はやっと年収900万円ぐらいになったのですが、キー局だと私の歳で1200万円ぐらいとります。仕事は同じぐらいで、300万円の差はあります。

――しかし、900万円、1200万円は日本の賃金状況からではすごいですね。もっとも月50時間の残業があってのことですね。

（左谷）残業はもっと多いでしょう。聞いてみると「昨日は夜中の３時まで編集して朝は６時でワイドショーに出ている」というような労働をしています。

――マスコミ文化情報会議の調査でもいわれていますが、テレビの職場はよく死にますね。

（左谷）４年ぐらい前、次からつぎによく人が死にました。今は定年退職後の死亡が多いそうです。

――せっかく年金ももらえるというのにかわいそうですね。以前、新聞労連が追跡調査をしていましたが、死亡率はだいぶ高かったようです。

（左谷）うちは60歳定年ですが、身体がもたないからとても60歳まで働けないと思います。とくにマスコミの仕事はストレスがひどいです。

――プライバシーにかかわって恐縮なのですが、左谷さんの生活時間調査票の記入をみて、サウナやマッサージがありまして、40歳代独身女性でそうなのかなと、やや疑問に感じていましたが。

（左谷）あまり疲れるので針にも通っています。保険がきかないので大変ですが。

◆専門職の女性と男性の価値感の差

――忙しいなかで左谷さんは、労働組合活動をおこなっていらっしゃいますね。労働時間と組合活動時間との関係はどうですか。

（左谷）民放労連の中央執行委員をやっています。仕事で出張がはいると悲惨です。

――民放の20歳代の独身男性にも調査票の記入をしてもらったのですが、20歳代で年収780万円はすごいなと思ったのですが労働時間がものすごくて、これでは組合活動はどうなっているのだろうかと思いました。

（左谷）20歳代では自分の生活なんかありません。組合のことでも、ストライキだと、「ああやっとさぼって寝れる」という状況です。

――そうしますと、独身女性に組合活動のしわ寄せがくるというか、女性が担っているという状況があるのでしょうか。

（左谷）女性は婦人部がありますが、男性は執行部からの組合系列一本で、しかも職場に組合運動がない状況があります。女性は婦人部や民放独自の婦人集会、また働く婦人の集会など、

https://rodosoken.com/

組合の縦系列以外のつながりがあります。即組合として拘束されるというよりもライフワークの一つとしてそれに取り組むということがある。猛烈企業戦士にはそんなつながりはありません。男性のなかには企業意識が強い人がいますね。

――男性よりも女性の方が組合活動の参加はいいのですね。「放送を創る女性の会」というのもありますね。

（左谷）女性にはまじめに考える部隊があると思います。そして働いている女性の集まりでは必ず自分とその生活が語られます。それは女性は子育てがあるし、それを通じて別の世界があるからです。しかし男性には自分がない、組合をやっている人も賃上げと合理化反対しかないし、それは企業のことであり、自分とその生活が前にでていない。そうすると企業戦士にならざるをえない面があるのかなと思います。価値が一辺倒になりがちなのです。

本当に男性には「アフター5」がないです。女性には組合に集結しない人でも自分の生活があります。例えば仕事が終わるとさっとスポーツクラブにいって健康管理をしていますが、男性の場合にはよくずるずるといます。仕事がおわっても男と飲みにいきます。

――ほんとに、どこかの店にボトルがキープされていて、そこから流れて、また飲み屋に言って、そこでカラオケを歌ってという、よくあるパターンをくりかえしますね。

（左谷）東京に来た時は、男の人ともつきあわなければいけないと思って何回か行きましたが、前と同じメンバーと行って、またこの前とまったく同じ内容を話しているのです。もう全然話にならないと思って、やめました。女性は自分を磨きたいということがあるし、そのことを率直に話し合うのですが、男はサバイバルだからどう磨きたいなど相手に言えないようです。

◆女性と男性の生活時間

――専門職独身女性で特徴的な生活問題といいますと、どういうことがありますか。

（左谷）独身女性では、老後の不安が一番です。40歳代から老後のことを考えています。民放労連のある集会で、今の間に定年後も食べてゆけるために資格をとりたいという女性が多くいました。そしてどんなお墓にしようかといった話がでます。子育てをしている方は老後はやりたいことがたくさんありますが、独身女性はそうではないです。

――生活時間では男女の違いはどうですか。

（左谷）演劇をよく観にいったりするのは女性ですね。私たちも組合で映画のチケットを売りますが、行くのは女性ですね。私も夜の演劇に行くために勤務時間中にパンをかじったりしても行きます。

――女性には生活時間を自分で設計できる価値感とか意志があるのですかね。

（左谷）独身女性は男性よりもメリハリをつけています。山に行く人もいます。私も組合活動のないときには必ず映画にいくことを決めています。土曜日の朝に映画に行って、日曜日の午前中に掃除など家事をかたづけます。午後はゆっくりするというのが土日のパターンです。

――週休二日制だと生活のリズムがつくれますね。

（左谷）一応事務職ですから休めます。月から金までのストレスはすごいですから気分転換をしないとやっていけません。